
Angel Code

今宮いたる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Angel Code

【Nコード】

N7229X

【作者名】

今宮いたる

【あらすじ】

—Angel Code それは神をも恐れぬ天使の因果律—
中里翔がトリップしたのはドラゴンが空を飛び回る異世界だった！
？ 貧乏学生の中里翔は突如モンフォール家皇女、ソフィーにパートナーとして異世界に召喚されてしまい…？ 超能力異能バトルあり、ヒロイン弱めの主人公なかなか強い系です。

強制召喚！

隙間風が入るドアを開け、電気のスイッチを押した。

「……あれ？」

部屋は暗いまま。何度も押すが、何も変わらない。

中里翔は再び絶望する。

ついこの前ガスを止められたばかりなのに、こんな早さで電気まで止められるなど思いもしなかった。

「はぁ」とひとつため息を付き、何も置いていない居間に腰を下ろす。畳はもう畳といえるのかどうか怪しいほどに劣化し、いくら掃除しても埃っぽい部屋に咳が出る。

中里翔はとても貧しい。見るからにボロボロのアパートの狭い一室に住む彼は、高校2年生でありながら毎日アルバイトをして生計を立てている。彼の親は超巨額の借金を残して蒸発。生きているのか死んでいるのかも分からない。そのとんでもない親が残した借金を返すべく青春のすべてを削って、いや青春どころか人生のすべてを削って返済に苦心している。

彼はおもむろに立ち上がり、洗面所へ向かう。

錆びついた蛇口をひねり、手を差し出す。

「……」

何も出ない。

「……」

彼は無言で元いた場所に戻り、「もー！」と声を上げて仰向けに寝転ぶ。いや、寝転ぶと言うより、倒れこむと表現したほうが近いかもしれない。

水も止められていたのだ。

「なんで俺ばかりこんな目に……」などと思ってもしょうがないことは彼が重々に承知しているので、そんなことは嘆かない。中学生の時もずっと働き詰めだった。雇ってくれていた店主も彼の見掛

けで高校生ではないことに気づいていたが、「人には言えない事情があるのだろう」と、温情により内密で働かせてもらっていた。このように、こんな生活をしているのはついこの前からのことなどと言うわけではない。もうずっとこうなのだ。どう足掻いても抜け出せることなくてできないということなど、まだ子供心の残るこの当時から分かっていた。腹の底から理解していた。理解というより使命だと思う感情の方が強かったかもしれない。そうでもしないと、こんな理不尽な環境に投げ出された自分自身を、彼自身がフォローしきれなかったのだ。

一言で言ってしまうえば、彼の中にあるものは『諦観』の文字だけだった。

この世の全てへの諦観。自分を救ってくれる人も、自分を愛してくれる人もさえもない。否定したいが、現実が彼をがんじがらめにして絡めとってしまう。

今日も働き詰めで帰宅した彼だが、居間に倒れこんだままそれ以上ピクリとも動こうとしない。ご飯も、なけなしの100円で購入したパンを昼ごはんに食べただけでそれ以外は何も口にしていない。そもそも、この家に冷蔵庫などないので食料を保管する所などないのであるが。

彼はそのまま深い眠りへとついてしまった。



雀の囀りが聞こえる。

昨夜の制服姿のままの翔はその清々しい朝のお告げで目が覚める。時計は腕時計しか持っていないので、眠気の残る眼を右手でこすりながら左腕手首にはめているそれを確認する。

時刻は8時20分。

思わず「うげえっ」と悲鳴にも似た声を漏らしてしまう。ただで

さえ困窮している生活の中で必死に学費を捻出している彼は遅刻などという勿体無いマネはできない。何より次の奨学金に大きく響いてしまうので、無遅刻無欠席全出席の皆勤賞はどうしてもゲットしておきたい肩書きだ。

「うわああ」という情けない声を上げながら急いで用意をする。と言っても、制服は既に着用済みであるので、カバンに時間割を合わせて教科書をつっ込むだけで用意は完了した。そしてその重いカバンを引っ提げて勢い良く玄関の扉を開いて猛ダッシュ。自宅から学校までは歩いて約25分。全力で走っても8時半から始まる朝の会には間に合わない。

彼は全力で走った。なりふり構わず走った。自分の人生を賭ける勢いで走った。まるでオリンピック決勝の舞台で疾走するランナーであるかのように、走ることにのみ集中していた。

彼の目の前に広がるのは道。

高速で視界を流れる道、道、道。

半身をかがめて全力で走る彼は、前を向く余裕なんて一切なかった。

だから。

だから気付くはずもないのだ。

大通りに面した交差点が赤信号だったことなど、彼の視界に及ぶ訳がないのだ。

もちろん、全速力で赤信号をぶっちぎる青年に大型トラックのブレーキが間に合うはずもない。

翔にそれを気付かせたのは、金属を引き千切ったかのように耳を劈くブレーキ音だった。

「あ、これはダメなやつだ」と一瞬で判断する。周囲から聞こえる

悲鳴。恐らく通行人の人たちが今眼の前で轢かれようとしている一人の青年にもたらされる悲劇に悲嘆する声だろう。

目の前に迫り来る巨大な鉄の塊。運転席の窓からは必死にブレーキを踏むおじさんの姿が見える。

――走馬灯が流れる。

彼の幼い頃の記憶。

ずっと施設に預けられっぱなしで、親が引き取ったかと思えばロクに育てるわけでもなく。絵本数冊と適当なおもちゃで遊んだことしか記憶にない幼少期。誰も来てくれなかった参観日と運動会。教科書しか読むものがなかったから、一日中それを読みふけていた中学生時代。それでも中里翔は親に振り向いて欲しくて必死で勉強した。なぜ勉強なのか――彼にはそれしか思いつかなかったからだ。勉強するのはタダ。お金がかからないことで、努力ができるもの。それが勉強だったのだ。

だが、その健気な場面でさえ、登場するのは彼一人。誰もいない。

彼の記憶には、自分以外誰もいないのだ。

彼の目からは涙がこぼれた。

小さい声で「畜生……！」と呟く。

その声さえ目の前で猛り狂う冷たい鉄の塊の金属音でかき消されてしまう。

「ああ、何も無い人生だったな」
ぶつかる瞬間、彼はこの光景がコマ送りの映像の切れ端のようにつながってゆく感覚を覚えた。まるで自分の周りの空間だけ時間が

緩やかに流れているような、そんな感覚だった。

「もし……！　もし次生まれ変わることができるなら……！　本当にほんの少しでいいんだ……雀の涙程も無くてもいい……！　それでもいいから、今よりは希望の持てる人生を——」

トラックは無情にも、殆ど勢いを殺すことができないまま通過した。

悲鳴から静寂へと変わる。

目を覆う通行人達は恐る恐る瞼を開く。

しかし彼らは中里翔を見つけることができなかった。

それどころか、道路はタイヤ痕があるだけで、血一滴、布切れ一枚も落ちていなかったのだ。

――

翔の顔には何か柔らかいものが当たっていた。とても気持ちがいい。今までに経験したことのない、まるで天使に包まれているような感覚だった。思わず頬ずりをしてしまう。

「ハッ！　これが俗に言う天国！？」

彼は自分の辛かった過去を振り返り、涙が溢れるような思いでその柔らかいものに顔を擦り付ける。

「な、な、何してんのよ――――！！！」

急に顔面が腫れ上がるような痛さを覚え、彼女の悲鳴と共に彼の体は後方に飛ばされる。同時に「この変態！　変態！」と罵る声。

「突然私の胸に飛びついてくるなんて、いい度胸をしているじゃない？」

ぶたれた右頬をさすりながら、我に返る。

「あ、あれ？　俺、死んだんじゃ――」

見上げると、目の前にはブロンドの美少女。おとぎの国から出てきたような流麗な顔立ち。どこかの王国のお姫様かのような気品を漂わせながらも、16、7歳らしい可愛さも兼ね備えている彼女に、翔は思わず言葉を失ってしまう。

そして、周りからは何故か拍手が聞こえる。

「ソフィー、よくやった!」「うわ、男だ!」等々の歓声のような感想で周りが沸き立てる。翔は辺りを見回すと、彼とその目の前の少女は大勢の人たちに囲まれていたのだ。何が何だかまったく訳がわからない。

「……あんたがパートナー、ねえ」

その優美な少女は彼の手を引き起立させる。

「私の名前はソフィー・ド・モンフォール」

そう告げると何やら不服そうに目を背ける。

先生と見られる人たちに律される。

「あんた、今から私のパートナーになりなさい」

何を言っているのか全くわからない。

ふと空を見上げると、見たこともない巨大生物が空を飛んでいた。彼の幼少期に絵本で見た記憶が正しければ、あれが『ドラゴン』というやつではないだろうか。

彼は意識が遠くなるのを感じた。

強制召喚！（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ！

ストレッチェール国学院

「中里！ 中里！」

自分を呼ぶ声がある。この唖れた声は担任の先生だ。声はすれども目の前の世界は真っ暗。「ヤバい、授業中に居眠りなんて！」と、咄嗟に思った。なるほどそれならば先ほどの変てこ異世界も「夢でした！」で無事解決できる。彼はホッと安心したが、それでもこの厳しい極貧の現状には何ら変わらないので、安心というのは少し語弊があるだろう。彼は必死に起き上がろうと体に全身全霊の力を込めて「起きろ！」と指示を送る。何度も念じると、段々と体が順応するようになってくる。体に力が入る感覚。「よし、起きられる！」と、一気に力を入れて上半身を持ち上げる。

「すみません！」

やっと起きることができた翔は、同時に謝罪の言葉を添える。

「……？」

そっと目を開けると、見たこともない部屋だった。

まるで高級ホテルの一室のようであった。いや、それよりもずっと広いかもしれない。翔は何がなんだか分からなかったが、ひとつだけ分かったことは、「これは教室でもなければ自分の部屋でもない」ということだった。辺りを見回すと、自分の寝かされているベッドの右横でおでこを赤くしてぶっ倒れている、見覚えのあるブロンドの美少女。紺色の上掛けと制服と見られる白色の服に、紺のスカート。

思わず「うわあ！？」と声を上げて驚いてしまうが、「何が『うわあ！？』よ！ 痛いじゃない！！！」と涙目でおでこをさすりながら必死に文句を言ってくるこの少女は一体何者なんだというのが、翔が真っ先に浮かんだ疑問だった。

「あのお……、誰？」

意外と冷静な翔。世界が一転しすぎたら逆に大人しくなってしまう

うというのも人間心理的に分からないでもない。自分の汚れたみすばらしい制服と部屋の高貴さが全くもってミスマッチだ。純白のベツドと布団に、彼の汚れが浮き出てきそうさ。

「自己紹介してあげたじゃない。ソフィー・ド・モンフォールよ」

「ソフィー……モン……？」

見るからに日本人ではない名前。確かにそう告げる美少女は日本人ではなさそうさ。

「略すな！ 誰がソフィモンよ！ そんなで、あんたは？」

彼は別に略したつもりはない。続けて「俺は中里翔」と自己紹介するも、「シヨウ？ ふうん。ま、何でもいいわ。それじゃ、行くわよ。あんたのせいで遅刻してるんだから」と少し適当に流されてしまう。

「ちょ、ちょっと待て！ 一体ここはどこなんだよ？ 家に帰して欲しいんだけど！」

「はあ、家。あんたの家はここよ。ストレシール国学院の私の寮室があんたの家。分かった？ じゃあ行くわよ。付いてきなさい」別に学力が低いわけでもない翔だが、さすがに彼女が言っていることは一つも理解出来ない。

「おいおい！ わかるわけないだろう！？ とにかく帰してくれよ！

警察呼ぶぞ！」

最終手段の警察の名前を早くも引っぱり出す。さすがに今回は彼が有利だろう。誘拐罪に当該し、可哀想だがこの少女は逮捕。仕方がないが、困窮している彼はこのような手段を使ってでもこの状況を打破して学校やアルバイトに戻らないといけなのさ。

「……？ 何それ？」

訝し気な視線を送るソフィー。全く堪えている様子もない。翔はこの態度に逆に気圧されてしまう。

「意味分かんないこと言ってないで、さっさと付いてきなさい。蹴るわよ？」

同時に腰のあたりに回し蹴りを食らう。「脅しても何でもねえ！」

という文句も言えないまま、半分引きずられるように連れていかれた。

廊下は真紅のカーペットが一面に敷き詰められており、気品が溢れ過ぎていてどうしようもない。自分の置かれている状況がコンマ1ミリも理解出来ないまま、ただただ説明もなく連れて行かれる翔。驚嘆で声も出ない。

彼女に連れられて長い廊下を歩いていると、ひととき大きな扉が登場した。

ギギギ……と重厚な音を立ててその扉を開くソフィー。

目の前に広がる景色はまさに圧巻だった。

果てしなく広大な建物の中に総勢3000人はいるだろうか、ソフィーと同じ制服を着ている生徒たちが集まっていた。そのサイドには青い目をした琉美なドラゴンが数匹、ステンドグラスから差し込む光に幻想的に映しだされながら手綱などもされずに大人しく鎮座している。意識が遠のいた昨日の出来事は、決して幻ではなかったのだ。中里翔の視覚器官は見事なほどに正常に働いていた。見間違えではなかった。情けなくも「うわあッ……！ あっ、あ……！」と声を上げてしまう。「うるさい！ 静かにしなさい！」とソフィーに小声で注意されるもこれは仕方ない。誰だってあれだけリアルなドラゴンを見せられると翔と同じ反応をしてしまうだろう。

「あっ、ソフィーがきたみたい。にゃあにゃあ」

「本当だ。昨日の子も一緒だね」

列に並ぶアリシアは自慢のふわふわのネコミミをピンと立てながら、綺麗な白髪のユーディット・フォン・ルントシュテットとこそそ話をする。

「やっぱり昨日見たとおり、ちょっとヒョロいのにゃ」

「本当にあの人、強いのかしら？」

ソフィーは彼女たちのもとに列をかき分けながら近づき、ちょうど一人分が立てる空き場所を見つけて列に加わった。

「ちょっと！　なんであんたも付いてきてんのよ！」

「え？　いやいやあんたが連れてきたんだろうが！」

「じゃなくて！　ここに並ぶのは生徒だけ！　あんたは生徒じゃないんだから、あそこに行っていないさい！」

ソフィーが指さした先は、先程再び彼を驚嘆の絶頂に追いつめたドラゴンたちが鎮座している場所だった。

「うええっ！」

「変な声上げないでよね！　叱られたいの？」

ソフィーは「黙って従え」とでも言いたそうな視線で彼を威圧する。

「いいから、ほら。さっさと行きなさい」と背中を押されて、翔は仕方なくドラゴンたちが居座る場所へと移動する。

「……」

青い目のドラゴンと翔の黒い瞳が合う。

「……どうも……」

よく分からないが、彼はお辞儀をひとつしておいた。

するとそのドラゴンは「グフッ」と鼻息を吐いて小さく首を振る。まるで馬のようだ。それに驚いた翔は思わず後退してしまうが、その時に後ろ足で何かを踏む感覚を覚えた。恐る恐る振り返ってみると、それは別の竜の尻尾だった。長い尻尾が前方まで余って流れていたのだ。翔は息を飲んだ。トラックに引かれる寸前に強制召喚されて一命を取り留めた彼であるが、2度目のピンチも自ら招いてしまった。

「わああっ！」

思わず声を上げてしまう。

その声は巨大な講堂で話をしている校長を遮るほどであった。

講堂に集まっていた生徒たちも「何だ何だ？」とざわつき始める。「あのバカ……！」とソフィーが顔を右手で覆う。

「ドラゴン初めてなのかにゃー？」

背の低いアリシアはピョンピョンと跳ねながらその様子を見ようと頑張る。

「やっぱり召喚人は皆同じような反応だね」

「……そうね、まあ放つとけば直に慣れると思うけど、あんな目立つ所で……！ あとで殴る」

「やめとけにゃあ。可哀想だにゃあ」

猫のようなつぶらな瞳を細めてソフィーをなだめる。

◇
◇
◇

宣告通り翔には鉄槌がくだされた。

「何で殴るんだよ！？」

「なんでもクソもないわよ！ 目立つ真似しないでくれる！？」
生徒たちが教室や寮に引き返す中、巨大講堂の中で説教(?)を受ける光景。小学校だとよく見られる光景だ。

「仕方がないだろ！ ドラゴンだぜ！？ ドラゴンがいたんだぜ！？
さすがに無理だって！ 驚くわ！ しっぱ踏んだし！！！」

「しっぱを踏んだのはそっちが悪いのにゃあ」

ソフィーの横にいる小さい女の子が訂正を入れる。

「まあまあ、ショウくん。いずれ慣れるから、気にしないで頑張つてよ。ソフィーもそんなに怒ってないし！」

「怒ってるわよ！！ 恥ずかしいじゃない！」

急に話に入ってきた二人に戸惑う翔。

「あの、二人は……」

「ああ、紹介が遅れたね。にゃあ。私はアリシアだよ。そのままアリシアって呼んでね」

にっこりと微笑んでくれるが、猫耳がとても気になる。「まさか自前じゃあるまいな？」と、無意識にもその耳に触れてみる。

「あつ……！ ふつ……ああん……。今回の召喚人くんは積極的だにゃああ！ 良かったにゃあ、ソフィー？」

ソフィーはすでに翔に2度目の鉄拳制裁を加えていた。同時に「変態！」と罵られる。どうやらアリシアのソレはアレのようだ。

「いきなり女の子に触れるのはマナー違反だよ？ 気を付けないと！ ね、ショウくん？」

手を差し伸べてくれる胸の大きい白髪の女の子。目鼻立ちのくつきりとした、清純なイメージの持てる可愛い女の子だ。

「私はユーディット。よろしくね、ショウくん。私のことはユーディットでいいからね」

思わず鼻の下が伸びてしまう。

ところで、ユーディットは自己紹介もしていない中里翔の本名は知らないはずだ。知っているのは学校関係者とソフィーだけ。その証拠にアリシアも彼のことは「召喚人くん」と呼んでいる。それなのに何故彼女は「ショウくん」と呼んでいるのか。それは――。

【召喚人↓しょうかんにん↓ショウくん】

ただの偶然だ。

3人が翔を取り囲んで話をしていると、「おーい、早く教室に戻れよ。授業すんぞー」という声がした。

「あ、はい。すみません！ すぐに行きます」

その男性は中肉中背で30〜40代の外見、メガネをかけているがとても人当たりのよさそうな雰囲気を持っていた。

「次はカトラル先生だっけ？」

「そうだにゃん。私たちは違うけど、上級生の時間割へんこー！」

3人は教室に向かおうとする中、翔は「あんたも来るのよ！」と手を引っ張られる。「何の義理があって付いて行かないといけない

んだ」と思うも、ここが何がなんだか分からないので下手な行動を取るわけにも行かない。「ああ、これで学校の欠席1かあ……」と嘆く。ドラゴンを見たのにまだ帰られる気にいる彼だが、もう気も動転しきっているので今の彼には常識など通用しない。

「また遅刻させる気!？」と手をグイグイ引っ張るが、翔は全く乗り気ではない。テンションだだ下がりだ。意味のわからないところに連れていかれて、しかも意味のわからない学校に拉致監禁(?)されて、警察という言葉にも全く恐れを示さないソフィー。逃れる術などあるのだろうかと模索するも、ここがどこだか分からない上にドラゴンまでいる。どうしようもない。

「君が、召喚人かな？」

講堂で話していた人が彼の前に現れる。

振り返ると、3人もぴしっ于行儀よく起立している。

「……はい」

「身構えなくてもいい。私はラス・ベギリスタイン。このストレシエール国学院の校長だ」

威厳のある白ひげと重厚感のある瞳、声。それら全てがその地位の高さを物語っている。初見の翔でさえそのオーラで階級上位の人だと気付かされるほどだ。

「ソフィー、召喚人くんを、少しいいかな？」

ストレシエール国学院（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ！

俺が強いなんて、見当違いも甚だしいですよ。

最上階にある校長室で対峙する二人。

「残念ながら――」という言葉から始まった校長の話は、それはもう信じられなかった。全く支離滅裂であり、ご都合主義であり、非常に強引なものであり、信じるに値しないものであった。

「――何を言っているのかわかりません」

翔はせっかく長々とことの経緯を説明してくれたラス校長の肩透かしを敢行する。

「……どの辺がわからないのかね？」

気を取り直して、翔の理解を得るべく彼への情報の再入力作業を開始する。

「まず、俺が『死んでいる』とは、どういうことでしょうか」

翔は掌いっぱいに嫌な汗をかきながらギュッと強く握る。

「ふむ、『死んでいる』というのは語弊があったかな。それは訂正しておこう。この表現が不適切ならば、『死ぬ予定だったところを召喚により回避した』と言い換えるべきか」

「……はあ？」

気の抜けた返答。

そもそも召喚など、翔の知っている世界には存在しない。

「つまりは、君は死んではない。だが、あのままだと死ぬ所だった。その当時の君の身に何が起きたのか詳しくは知らないが、そうだろう？」

生唾が喉を伝う。

翔はあの身の毛もよだつ光景を思い出した。

トラックが接近し、その冷たい金属が肌に触れようとする、あのおぞましい瞬間。

あれは、彼の夢ではなかったのだ。

「人が死ぬのは避けられないことだ。私たちの力を持ってしても、

助からないものは助からない。だが、その瞬間に陥る前であれば助けることができる。ソフィーはそれを君に施したわけだよ。君はソフィーに命を助けてもらったんだ。その引換として、この異世界、『ストレシエール』に飛ばされた。それだけの話だ」

先ほどの説明をもう一度する校長。髭が長いのが気になる。

「『それだけの話って』……！ わかんないですよ！ 確かに俺は死にかけました。今の今まで、この世界が夢なんだって思ってた。もしかしたら死後の世界かともか思ってた。ですが、校長の話聞く限りではここはそうじゃない。俺が今まで住んでいた世界とは違う、別世界……。こんなの、聞いたこともありません！ 信じられる訳ありません！」

「矢継ぎ早に文句を言うんじゃない」と右手の掌を翔に向けてストップの合図を出す。

「君が信じないのはあんたの勝手だ。だが、ここは確実に別世界。直に信じざるを得なくなるよ。正直な話、そんなことは強制的に分からされることなのだから、議論に上げるまでもないのだよ」

翔は否定したかった。言えるものならば挑発的な否定の言葉がどんどん出てきそうな勢いだ。しかし彼は言葉を紡ぐことを止めざるを得なくなってしまう。貴族、見たこともない景色、極めつけにはドラゴン。言ってしまうえばソフィーもアリシアもユーディットも翔の知っている世界の人々とはどこか違うような印象も感じる。特にアリシアに関しては人外の耳が生えていた。

「一応は形だけでも理解、してもらえたかな？」

わざと一拍置いて強調する校長。

「じゃあ……」

かすれるような小さい声。

「じゃあ、もしかして、俺は帰れないんですか？」

「そうだ。帰れない。君が飛ばされた世界はもう君抜きで動いている。君を強制的にあの世界に戻すのであれば、矛盾のない瞬間を選んで飛ばし直さないといけない」

「矛盾のない瞬間……?」

「覚えているだろう? ココに召喚される前に、自分がいたその瞬間の場所、だ」

翔は恐怖で体が震えた。

彼が元の世界で最後にいたその瞬間、それは――。

「戻りたいか?」

「い、いえ……」

戻れば即死だ。観念せざるを得ない。

「では、ここからが本題だ」

翔は驚いた表情を見せる。

「ええ!? 今までののは前フリ!?」

「そうだ。ここが君の知っている世界ではないということを前提として知ってもらわないと話が通じなくなってしまうからね」

かれこれ30分以上経っているが、これが全て前フリだとは翔も流石に思わなかった。

「君が何故ここに召喚人として選ばれたのか、について――」

翔は息を呑む。

「ソフィーが君を召喚能力で喚び出したわけなのだが、実際は君を指定したのは私だ。ソフィーは偶然だと思っているだろうが、それは違うのだ」

もちろん翔は訳がわかるはずがない。「なんでですか?」と漠然かつ正当な質問を豪速球で投げ返す。

「そりゃ、君が強いから。それだけだ」

翔は拍子抜けしてしまう。

「俺が強いなんて、見当違いも甚だしいですよ。むしろ弱いです。ましてや超能力なんて……」

この返答に校長は「何も知らんのお」と背筋を伸ばす。

「別に認めなくてもいい。直にわかる」

全く釈然としない回答だ。「何が――!」という反論も、その返

答の一点張りで返されてしまい取り付く島もない。

「……はあ、もういいです」

観念した翔に校長は「勝った」とニヤニヤする。高貴さも伴いながら、どこぞの悪代官のように映るのは気のせいだろうか。

「……ソフィーはな、弱いんだ。皆が使える超能力が、一つも満足に使えないんだ。どうせ一度は死んだ命。そんな自分を救ってくれたか弱い女の子を守ってやるのも、また男のロマンじゃないか？」

翔は反論ができない。

確かに一度は死んだ命だ。今熟考してもあの状況から助かる方法が思いつかない。ソフィーが召喚してくれたから、今の自分の命がある。

コンコンとノックをする音。

ガチャリと開かれたドアから出てきた人は、上級軍曹のような顔つきの、いかにも凛々しい男性だった。背丈も180センチ前後はあるだろう。髪は短めに整えられており、眼光はまるで獲物を前にしたライオンのようなうだ。しかし紳士としての高貴さを兼ね備えており、スーツ姿が抜群に似合っている。

「シェンか。どうした？」

「……」

言葉は発しない。

翔は完全に彼の圧倒的な雰囲気吞まれてしまい、言葉を失ってしまっている。

シェンと呼ばれるその男性は胸ポケットからメモとペンを出し、さらさらと何かを書いて校長に差し出す。

「ほう、まあた政府か。私は今いないと伝えておいてくれ」

「こゝちよゝ！ 連れてきたよ！」

長い髪の毛をふわふわと揺らしながら一人の女性が厳しい顔をした政府役人を連れてくる。

「……」

口を大きく開けて驚嘆する校長。

彼女はシェンに額にメモ帳を突きつけられて「あたっ!？」と驚きながら痛がる。そのメモには、「許可無く連れてくる奴があるか!」と書かれていた。

「えー! だって用があるって言ってたんだけど!」

「バカ正直に対応をするな!」と即座にメモで返答される。意識はしていないが、半筆談のこの状況では詰めかけた政府役人には話が分からないから、とりあえずはセーフティラインだろう、か……?

「あ、ああ。シェン、もういい。ウラと召喚人を連れて、席を外してくれないか?」と会話を寸断させると、校長は政府役人と自分を部屋に残して、3人を部屋から追い出してしまった。

廊下でシェンにボカッと頭を小突かれるウラ。

「いったーい! 何するのよう」

ウラは涙目で抗議に出る。肩まである銀髪と、低めの身長に目鼻立ちのくっきりとした可愛らしい女性だ。容貌から察するに、彼女もシェンもきつと教師だろう。彼女の目の前には「政府役人は校長の許可なしで通してはいけないと、何度言ったら分かるんだ?」と書かれたメモが突きつけられているが、「ひ、人は間違いを犯す生き物なんだよ!」とウラは両手を振ってそれを否定する。

「ねえ? 召喚人くん?」

「うえ!?! あ、はい、そうですね……?」

突如同意を求められた翔は反射的に賛同してしまう。

「ほらあ」とシェンの方を振り向いたウラは同時にメモ帳で小突かれた。そしてシェンはそのまま方向を変えて向こうの方に歩き去ってしまった。

「むー!」と不満そうな態度を示すウラ。

「お、話は終わったのか?」

眼鏡のよく似合う朗らかな印象を受けるあの先生がこちらに近付いてきた。

カトラルだ。

「終わったんなら、早く教室に行かないとな！ ソフィーがお待ちかねだぞ？」

「おお、ソフィーのパートナーって君だったのかぁ」

ウラは両手で小槌を打つ仕草をする。

「おおそうだ。中里翔くんつつてな」と、翔はカトラルに自己紹介をされてしまう。仕方ないので「どうも」と愛想笑いを浮かべるしかなかった。

「初めまして！ 私はウラ。それでもストレシエール国学院の教師なのですよ」

誇らしげに胸を張る。大きめのバストがしんどそうだ。

「ちなみにあの無口なおっさんはシェン。シェンも教師だからね」

彼の予想は見事に当たっていた。

俺が強いなんて、見当違いも甚だしいですよ。(後書き)

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ！

侍

見るからに重厚で重たそうな扉を、力を込めて押す。すると意外にも簡単に開いてしまい、「うわっ!？」と声を上げてしまった。

もちろん、大講堂とはいえ先生が授業をしている空気の中で、後方からいきなり声がすれば皆の注目も集まってしまう。先ほどの一件で翔は少し顔の知れてしまったので、皆の反応は「ああ、またあいつか」という程度で収まった。しかしそれはソフィーにとっては恥ずかしいことであり、「早くこっちに来なさい!」とわざわざ席を立てて手を引きに来てくれた。

「もう、何してんのよ! 恥ずかしいじゃない!」と、席に座りなおしたソフィーは、自分の横の席に座らせた彼に小声で苦言を呈する。

「だって、扉が思ったより軽くて……」

「はあ? 訳わかんないんだけど。どうでもいいけど、目立つマネはやめてくれない? っていつでも手遅れだけど! バカ!」

これで連続2回目だ。翔も「う……ごめんなさい……」と反省するのが筋だろう。

その光景を、講義を続けながら何度も何度もちらちらと見つめる教師。「あれは……」と、心に嬉々とした確信を持ちながら教鞭を振るう。その手に自然と力が入ってしまうのは、その彼の確信が的中しているからだという、明確な自信からくるものだろう。

授業が終わってもまだ文句を言われ続けている翔。授業中も小声で叱られていたのだが、終わっても延々と続くそれにうんざりしてしまう。しかし、自分の命を救ってくれた彼女に歯向かうのも何だか歯切れが良くない。たとえば、彼女がその真実を知らなくても、反論するのは咎めてしまう。なんせ、命の恩人だ。彼女がいなかったら、彼は確実に死んでいた。強く出ることなんて、普通の人間ならばできない。もちろん翔も例外ではない。強くなんて、出られるわ

けがない。反省の言葉と共に「ぐう……」と押し黙ってしまう。まさにグウの音も出ないとはこのことだ。しかし、そんな幸運で不憫な彼のもとに一つの助け舟が渡される。

「その召喚人！」

授業が終了した講堂に、その声が一際大きく響く。

驚いた翔は「俺のこと……？」とソフィーに確認を取る。「そうじゃないの？」と、心許無さげに答えるソフィーだが、本人も思わず驚いてしまったことを翔にバレないように取り繕うのに精一杯であつた。

そして、急ぎ足でツカツカと迫ってくる教師。その足音にもいちいちビクビクしてしまうのは、彼がこの世界にまだ全然慣れていないからだろうか。

「君、名前は！」

目の前に佇む教師に両肩を強く叩かれ、掴まれる。翔は「ひいつ」と一步引いてしまう。アリシアとユーディットは遠くからその行く末を眺めているが、助けてくれる様子もない。成り行きをワクワクした目で見つめるだけだ。「うう……絶対助けてくれる気ないよ、アレ……」と、心のなかの救助要請をするまでもなく即却下。

「な、中里翔です……」

ただの自己紹介に、恐る恐る答えてしまう。

彼の名前を聞いたその教師は「中里……翔……」と、彼の両肩に手をおいたまま感慨深そうに首を下にむけてしまう。その反応に、翔は大きく戸惑う。「えっ、どうしたんですか？」と気遣う。その奇妙な光景に、即横にいるソフィーもただばかんと見つめるだけ。「その懐かしい響きのある名前、風貌から察するに……中里翔といったか、お主、もしか……」

声が震えている。彼の両肩に置かれる手も同時に震えている。

「日本人か………?」

武骨な彼の顔はくしゃくしゃになっていた。

そして、訴えかけるような目。

見覚えのある、その肌の色。

翔は「はい」と肯定する。

同時に、「やった————！！！」と大歓声を上げて喜ぶ。またしても講堂に声が響き渡る。「相変わらず大きい声なのにゃ」と少し離れた位置にいるアリシアが感想を漏らすほどだ。その教師は肩に置いていた手を翔の両手に移動させ、ギュウツと強く握る。

「私は時任鹿之助！ お前と同じ、日本人だ！」

翔は驚きの表情を隠せない。その隣で、「何言ってるのかわからない」と言いた気な表情を浮かべて立ち尽くすソフィー。

「いやあ！ 懐かしいなあ！ 懐かしいなあ！！ もう日本人には会えないって、ずっと思ってた！ よう来た！！！」

まるで久しぶりに会った田舎のお爺ちゃんのような反応に、思わず翔は一步引いてしまう。しかし彼の風貌は「田舎のお爺ちゃん」とは程遠く、20代後半もしくは30代前後と推測される。更に彼の容貌もよくよく観察してみると、羽織のような服に足袋のような足元。腰には刀が差してある。それは翔の思い描く侍に限りなく近いものであった。

「さ、侍！？」と驚く翔など意にも介さず喜ぶ鹿之助。

戸惑う翔に、ソフィーは「時任先生も召喚人よ」と伝える。

「って、侍も召喚できるの！？ 時代を遡れるのかよ！？」

「？ はあ？ 時代を遡るも何も、私たちは能力のある人間を拾い上げているだけだから、そっちの時代考証なんか知らないわよ。あくまでランダム。そうじゃなかったら、私だってあんたなんか選ばなかったわ」

翔の召喚については、実はランダムではないことをソフィーは知

らない。

「そりゃまた強引なこと」と翔は思ったが、召喚人は能力のある人間が命を落とす瞬間に救い出すシステムであるということから、救い出された自分は文句を言えるはずもない。

「そうなんですか？ 先生も召喚人なんですか？」

感涙にむせぶ鹿之助は、翔の問に振り向く。

「そうだ。危ないところをラス校長殿の召喚術で救っていただいた」

時任鹿之助は召喚人。

ということは、何かしらの能力があるということだ。

しかし翔自身に能力が発現確認されていない今、いささか信じられるものではなかった。鹿之助も、パツと見は刀を腰に差した観光客にしか見えない。「絶対能力なんてねえよ……」と、マイナス方向の確信が強まってしまう。

「なんだかなあ」

翔は溜息をつかざるを得なかった。



「ふう、相変わらずお固いですね」

政府の関係者と見られる数名は、首を縦に振らないラス校長に痺れを切らせる。

「白状も何も、私は何も知らない。何度も言っているだろう？ だから、交渉のテーブルにも付けない。以上だ。帰りなさい」

政府役人たちは校長室から半強制的に追い出される。追い出された彼らを確認したウラとカトラルは入れ替わりで入室した。

「また政府の役人ですかあ？ しつつこいですねー」

「まあ、彼らにとってはこれが仕事なんだから責めることはできな

いけどね。それよりも、この指令を出し続ける政府中枢が問題だ」
腕組みをして口を尖らせるウラをなだめるようにカトラルが状況を整理する。

「奴らは私の尻尾をつかんでいる」

ラス校長の重い口が開く。

「……でしようね」

「やっぱり、アレですか」

カトラルもウラも、校長が指すものが何なのかは分かっているようだ。

「Angel Code……」

侍（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ！

努力の尊さ

夜の帳が下りる。

ストレシエールにも朝昼夜はきちんと存在し、不慣れな土地ながらこの辺は翔の生きてきた世界と何も変わらないようなので戸惑いはなかった。彼が一番楽しみにしていた夕食は、中里翔が人間であるということも大きく考慮されて、生徒ほどではないがそれなりの食事が用意された。牛肉のローストに、ポテトサラダ、パンとマーガリン。今まで100円の菓子パンしか口にして来なかった彼にとって、これがどれだけ美味しかったことか。感動で涙が出そうになりながら全てを綺麗に平らげた。近くで食事をしていたドラゴン達に若干引かれていたかもしれないことなんて、彼の知った事ではない。「引くなら引け！」という心意気だ。断っておくがドラゴンと人間の食事は一緒のものではない。

問題はその後だった。

彼の家はこの世界にはない。あのかび臭い畳に隙間風入り放題の彼の旧家は、この世界には存在しない。あるのは一面高級感で埋め尽くされたカーペットの敷いてある、テレビの中でしか見たことのないほどの超セレブが宿泊するような一室だけだ。これが生徒一人に与えられるストレシエール国学院の寮室だというのだから、貧乏人の翔からすればたまったものではない。

翔はソフィーから「あんたの家はここ」と言われている。他に行くあてがあるわけでもないし、ましてやドラゴンが空を飛ぶ世界でたった一人身寄りもなく彷徨うなんて真っ平御免である故に、ソフィーがこの指針を差し伸べてくれたのは彼にとって幸運であった。

ソフィーのいう「あんたの家」というのは、先刻も記したとおりソフィーの寮室である。ソフィーの寮室というと、当然ながら住んでいるのはソフィーだ。もっとと言及すると、ソフィー一人だ。そして、その一人で住んでいる寮室に翔は誘われている。

——これは一体何を意味するのか。
きつと何も意味していないのだが、女っ気のなかった翔は少しだけバツの悪そうな表情を浮かべる。

「……何よ」

夕食後、ソフィーはずっと自室の机に向かっている。ぎこちなくソファーに座りながら彼女を眺めていたら牽制球が飛んできた。

「いっ、いや、何も」

ソフィーの寮室には彼女と翔だけ。二人しかない。

会ってからずっと高飛車な態度なソフィーだが、それとは反比例するようによくよく見てみればやはり強烈な美人である。思わず彼女をポケーっと眺めてしまっていた翔は、しかめっ面をされて不審がられてしまったのだ。

「あのさ、さつきからずっと何してるんだ？」

「見りゃあ分かるでしょうに。勉強よ、勉強」

そう答えたソフィーはまた机に体を向け直す。

「へえ、偉いなあ」と感心しながら自分も同じ学生という立場だったことを思い出し少し慌てる。しかし恐らく帰還できないだろうことも同時に思い出して部屋の隅に置きっぱなしにしていたカバンから教科書を取り出す手を止める。

「ま、明日はテストだし。そりゃ勉強もするわよ」

「テストか……。そりゃ頑張らないとなあ」

「同情なんていらないから、あんたはもう寝なさい。部屋の端っこで」

「端っこかよ！」というセリフも虚しく、ソフィーはそれから反応してくれなくなった。「端っこって言ってもなあ、一体どこならいいんだ……」という困惑気味な独り言に、ソフィーは無言で場所を指さす。そこには毛布が一枚置いてあった。普通ならば人間の尊厳、威厳に関わる問題として異議を申し立てるべきところだ。しかしふわふわのカーペット（床）の上に毛布まで提供してもらえるこ

の状況の方が以前の生活の比にならないほどの好待遇なので、彼は文句どころか感謝の言葉を添えてそこに寝転んだ。ソフィーも何故感謝されたのかよく分からなかったようだが、「ま、いっか」とまた勉強にもどった。

夜の闇の深みは折り返し地点を過ぎ、そろそろ陽の光が差し込んできそうな時間帯。

地球でいう「月」のようなものが赤と紫、青の入り混じった妖艶な色で夜の闇に花を添えていたが、それもだいぶ白んできた。

翔は早起きだ。どれだけ過酷なアルバイトをしても、定刻になると必ずといっていいほど正確に目を覚ます。だからこそ先日の遅刻は彼にとって全くの想定外の出来事で、周囲への配慮など一気に思考の外へと追い出されてしまっていたのだ。その不注意が招いた結果が今のこの現状。しかしもうそろそろ悲しむよりは前向きに生きるべきだと、彼も少しずつ観念し始める。

右手で目を擦りながら、左手でふわふわのカーペットを掴んで起き上がる。彼の左手にあるのは木で彫刻の施された、どこぞの貴族が使うようなベッド。もちろんそれはソフィーのベッドである。寝ぼけ眼で彼女がいるはずのベッドに目を向けたが、既にもぬけの殻というか、寝た形跡が見当たらないほどにきちんとベッドメイクされている。羽毛と思われる枕に頭の凹んだ跡さえない。翔が少し変に思い始めた時、水の音が聞こえてきていることに気がついた。「なんだ？」と思いながらその音が聞こえる方に歩みを進める。

堅い床を叩くような水音に、ほんのりと暖かさを感じる部屋。翔の前には小汚い格好をした自分を映し出す鏡。「なるほど、風呂場か」と、途中で気づいていたが改めて納得する。風呂は翔の部屋にはついてはいなかった。しかし大概の家には風呂がついているものが主流なので、その存在の尊さに再び心を打たれていたのだ。しかも全面大理石な上に聞いても効能のわからなさそうな超高級化粧品と思しき小さなビンの数々。男の彼には興味のないものであるが、

どこか金持ちの象徴のように思えてきてしまい別の意味で目を奪われる。

彼は完全に油断しきっていた。

ガラッと扉が開いたときには、既に対処不可能だったのだ。

生き物は音にとっても敏感なものだ。大きな音がすれば万人がその方向を見てしまうし、人間どころか犬や猫などの動物もその方向に注意を向け、しかるべき次の行動を思索する。音というのは状況の変化をいち早く知らせる信号であり、危険を教えてくれるサインだ。だから翔が「ガラッ」と音の鳴った方を見てしまうのは不可抗力だ。決してソフィーのあられない姿を見たかったというわけではない！

「――言い訳はそれだけ？」

制服に着替えて身だしなみを整えたソフィーが不機嫌丸出しの語調で翔に詰め寄る。

「それだけです。本当にやましい気持ちなんて、これっぽっちも！手には引っかけ傷、顔には打撲痕。

翔もわざとではないとはいえ、当然の報いだ！この制裁を甘んじて受け入れる。

「全く！次やったら焼くからね！」

「すみません、すみません」と頭を下げる翔。こうなれば頭も上がらない。そして視界に入る教科書。手垢がついてボロボロになっている。

「無駄な労力使わせないでよね。今日は試験なんだしソフィーは欠伸をして出てきた目尻の涙を袖で吹く。

「ん、あのさ。ソフィー、昨晚は寝た？」

「寝てない」

「徹夜で勉強するのもいいけどな、でもやっぱそういうのって体に良くないぜ？」

翔の正論にソフィーは目線をそらす。

「……………仕方ないじゃない」

「ソフィーって勉強ができない——」

「できるわよ！ 失礼な！」

自分で「できる」と宣言するソフィーも相当だが、しかしできるのであれば徹夜などせずともクリアできるのではないかという疑問が彼の胸をよぎる。

「何よ、その目は」

「いや、できるんだったら徹夜なんかしなくても良かったんじゃないかなあって……」

「勉強はできるっての！ でも……」

「でも？」

「……………実技ができないのよ……」

いつもは自信に溢れている彼女の表情が曇る。

「……………実技？ 何だそれ？」

「試験は学業と対戦形式の能力実技試験があつてね。合計点が140点を超えないと進級できないの。って言っても浪人制度はないから、結局はただ合格の称号がもらえないまま上げさせられるんだだけだね。アリシアもユーディットももう先に行っちゃったし、私だけこれ以上置いて行かれる訳にはいかないのよ。周りの目だってあるし……。だから、寝ないで練習してたの。それだけ！ でも、その甲斐もあつてね、ほら！ これ見て！」

パツと笑顔の花が咲いたソフィーが差し出したのは、端っこが少しだけ焦げた一枚の紙切れ。

「……………ヤケになって火をつけたのか……………？」

「違うわよ！！」

翔はバシバシと頭を叩かれる。

「炎！ 炎の能力が、やっと使えたの！」

「うげえ、ソフィー、炎出せるのかよ……」

次からの仕打ちに炎が加わると思うと背筋が凍る感覚を覚えた。

「まだちょっとだけだからね。それでも相手次第ではわからないかも！ 前までは全然使えなかったから話にならなかったけど、今回は違うんだから！」

ソフィーは眼の下にクマを携えながらも湛える瞳は希望に満ちていた。それは自分の努力が開花しようと芽吹く瞬間。

中里翔は努力の尊さをよく知っている。それが誰にも認められなかった時の、あのなんとも形容し難い失望感と脱力感も知っている。紙が少し焦げる程度の能力だが、それでも彼女にとってはとても喜ぶべき大きな変化だ。ソフィーは「対戦形式」の実技だと言っていたので、恐らく勝ち目はないだろうことは素人目でも予想がつく。しかしそれでも。それでも彼はソフィーに勝って欲しいと心から願った。彼は努力が報われますようにと思いを込めた笑顔で、

「そうか。頑張ったんだな！　じゃあ、頑張れよ！」と答えた。

ようやく差し込み始めた朝日に、彼の笑顔に意表を突かれたソフィーの表情が鮮明に映し出される。

努力の尊さ（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ！

第7位

広大な敷地一面に芝生が綺麗に整えられていた。これが校庭だというのだから本当に驚きである。翔は呆気にとられてしまった。サッカーコート何面分などという話では収まらないほどに広大。「どんだけ広いんだよ……」と思わず口にしてしまうほどだった。

「ねえ、シヨウくん、シヨウくん！」

可愛らしい声の主が彼の名を呼ぶ。

「あつ、えーと、ユーディット……？」

「正解！」

はにかむ彼女はとても可憐だった。

「ああ、ソフィーもこんな娘だったら良かったのに……」と心に思ったセリフだったのだが、「悪かったわね！」とお叱りの言葉がソフィーから飛んできたところから推察するに口に出てしまっていたのだろう。

「えへへ、何だかわからないけどありがと。でもソフィーもね、最初からあんな風ってわけじゃなかったんだよ？」

「ええ〜？ あんまり信じられないなあ」

「ソフィーは勉強ができるの。私よりもずっと。でも実技試験が上手くいかなみたいで……。そのせいで去年も、その前の年も不合格にされちゃってるんだよ。それで落ちこぼれみたいと言われるようになったちゃって……」

「……」

翔はそんなこと初めて聞いた。

ソフィーの教科書は手垢でぼろぼろだった。

そして寝る間も惜しんで実技試験に備えて特訓まがいの練習をしていた。

教科書があればどぼろぼろになっていたのだ。きっと毎日毎日勉強していたのだろう。実技練習だってきつとそうだ。一朝一夕で身

につくようなものでもないだろうに、これも毎晩人目に触れない所で頑張っていたのだろう。彼にはその彼女の姿が容易に想像できた。高飛車な態度の裏にある傷ついたプライド。あの態度はソフィーの予防線なのかもしれない。これ以上自分に踏み込まないで欲しいという唯一にして最終の防衛ライン。踏み込んでしまうと、彼女のプライドが音を立てて崩れ去ってしまう――。

そう思うと、「うまくいってほしい！」願う心が大きくなる。

学術試験は午前部に終了していたので、今は校庭で『実戦形式能力実技試験』が行われていた。彼の目の前で繰り広げられている光景は、まさに映画の中の世界だった。わけのわからない呪文を叫んだかと思うといきなり火柱が立ったり、対する相手はどこに隠していたんだといわんばかりの水流で対抗する。そして対戦相手のどちらかが戦闘不能になる、もしくは教師陣により戦闘不能と判断される、または自主的な降参をすることにより勝敗が決する。これも学術試験と同じく100点満点で換算され両試験の合計点が140点以上あれば晴れてランクアップが認められるのだ。

「では、次。アリシア・イエールオース」

「はい」

会場の空気が一変する。

名を呼ばれた少女は猫耳をピンと立てて対戦相手発表を待つ。

「お、あの娘って……」

「アリシアだよ」

そして彼女の名前が呼ばれてすぐに対戦相手が発表される。その名を呼ばれた生徒の顔面は蒼白。周囲からは同情する声が漏れ聞こえる。翔は全く持って理解できなかった。なぜなら、アリシアはどう見ても弱そうだったからだ。猫耳を生やしたキュートな外見に制服の上掛けが地面を擦るくらい背も低いときたら、強い姿は想像に

難しい。

そんな少し失礼なことを思いつつ教師陣の戦闘開始の合図が出た途端に、相手は血相を変えて素早く挙手をする。

「お？」という表情をするアリシア。

「降参により、勝者、アリシア・イエールオース」

カトラルがアリシアの方に旗を揚げる。

「え……？ 降参……？」

「まー仕方ないよ。アリシア相手じゃ勝ち目がないどころか、ただじゃ済まない可能性もあるからね」

ユーディットは全く手を下さずに勝ち名乗りを得たアリシアに視線を送りながら語る。

「ただ……。私は対戦してみたいけどね」

彼女の可愛らしい顔立ちと立ち振る舞いから似合わない発言。翔は思わず生唾を飲んでしまう。そしてそのまま次に呼ばれたユーディットはゆっくりと試験会場であるフィールドに歩き出す。

「それでは、対戦開始」

カトラルが旗を振り下ろす。対戦開始の合図だ。対戦とは、先ほどの降参という例外を除けば、もっと活動的であり、一挙手一投足に注目が行き、能力の応戦による派手なものが主流であるはずだ。

――だがしかし。

そこに広がるのは異様な光景だった。

何もせずにただ立っているだけのユーディットに、対戦相手のトラヴィス・アラカルトは一步も動かない。全く動かない。

――いや、動かないのではない。トラヴィスは動けないのだ。動こうと思っても、体が言うことを聞かないのだ。

カトラルが時計を見、トラヴィスの方に視線を送る。「ここまでだな」と判断したカトラルはユーディットの旗を高く天に翳した。

「トラヴィス・アラカルト、戦闘不能。勝者、ユーディット・フォン・ルントシュテット」

アリシアと同じく、ユーディットも何ら手を下すこと無く勝利を得た。

「……？ 一体何が起こってんだ……？」

翔がこんな反応を見せるのも全く不思議ではない。アリシアは相手の降参によるものだった。しかしユーディットに関しては全く動作もしないまま相手が戦闘不能になってしまったのだから、彼の理解に及ぶ範疇ではない。

「『シャドーゲート』。ユーディットの能力よ」

より見やすい離れた位置で観戦していたソフィーが、いつの間にか彼の隣に戻ってきていた。

「シャドー……？ 影……？」

「そう。影。影に触れた瞬間、相手の自由をすべて奪い去る、完全無欠の絶対拘束能力。ASTG (All Schools Total Government) 全能力学校統合政府) 第7位、ユーディット・フォン・ルントシュテット、その人よ」

翔は言葉が出なかった。まさに顔に似合わずとはこのことだ。彼女の能力ならば、相手の自由を全て奪い去った上での攻撃が可能ということになる。えげつなさが計り知れない。

この圧倒的勝利の余韻もさめやらぬまま、「ソフィー・ド・モンフォール」という名前が会場に鳴り響く。次はついに彼女の番だ。その名を聞いた学生たちからは歓声が湧き上がった。

「うわっ、なんだ!？」

「……………」

ソフィーは苦虫を噛み潰したような表情だ。翔も間もなくその理由が分かることになる。

「どうか俺を当ててくれ！」

「またソフィーが降参するぞ！」

「こりゃあまた面白いものが見れそうだ」

……つまりはこういうことだった。

ソフィーは完全にカモだったのだ。

「あいつら……好き放題言いやがって……気にすんなよ、ソフィー！
頑張ってたんだから、きっと勝てる！」

「……応援はありがたいんだけど、何であんたは『我関せず』みたいな感じなのよ」

翔はソフィーが何を言っているのか、よく分からなかった。

「……へ？」

「あほ面引っ提げてないで！ ほら、あんたも来るのよ！」

実戦形式能力実技試験概要のひとつに「召喚人同伴の場合、共闘を許可する」という項目がきちんと盛り込まれているのだ。

「それでは、対戦開始」

第7位（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ！

囁うな

敗北して試験場を離れるトラヴィス・アラカルトⅡレギンレイヴは項垂れながら恨み節をこぼしていた。

「あんなの相手なんて、勝てるわけないじゃん……」

試験場をちらちらと振り返ったり、下を向いたり、口を尖らせたり、明らかに不満のある納得のいつていない仕草だ。それもそう、運悪くASTG第7位と対戦を組まされてしまったのだから仕方ない。しかし彼女も年頃の女の子なので、この世の不条理を痛感してしまうと八つ当たり気味の愚痴だってこぼしてしまう。

「ていうか！ シャドーゲートって攻略法無いわけ！？ 影固定の能力なんだし、体の動作をトリガーにしない能力なら対抗可能なんじゃないの！？」

「それでも既に先手を打たれているのであるから、不利なことには違いない」

トラヴィスの真上から低く重い声が降り注ぐ。

「何よそれー！ じゃあやっぱ勝ち目なかったんじゃん！」

トラヴィスは頭上を見上げて、その巨大な体軀をした青眼のドラゴンに文句を言う。

「ないわけではない。しかし立場上トラヴィスにだけ助言をするのは公平性に欠ける」

その返答に「ケチドラゴン」と一言だけ返し、ぷいっとそっぽを向いてしまった。

——レギンレイヴⅡドラゴン。

アラカルト家守護龍兼ストレシエール国学院の守護龍だ。

「ちえー。私もああいうのと戦えたら良かったのになあ……」

そう言う彼女の視線の先にあるもの。それは――。

事態は急務であった。

既に対戦開始のフラッグがカトラル先生によって切って落とされている。

ソフィーと翔の目の前にいるのは、余裕の表情を浮かべる対戦相手。ギャラリーと談笑している姿を見る所、彼らは相当嘗められている。

「しよ、翔！ チャンスよ！ いきなさい！」
いきなりの指示。

「うえええ！？ ちょっと待て！ 能力も分からないヤツ相手に丸腰で突貫とか自殺行為だろ！？」

「大丈夫だって。ベルテルは炎系だから」

「どこが大丈夫なんだよ！」

「まあ、やられたとしてもインフェルノを使われる程度よ」

「インフェルノって何？」

「1000℃くらいの炎で焼かれるの」

「死んじゃうよオツ――――！！」

せっかく召喚人がいて人数的に有利に立っているはずの二人であるのだが、このように全く連携がとれていない。戦い方について今更論議している彼らを見て、談笑していたベルテルは彼らを嘲笑し始める。

「なーにやってんだよ？ 早く攻撃してみせてくれよ？ 待ちくたびれっちまうわ」

完全に挑発的な態度で攻撃を促す。

しかし言い方は違うがその意見には翔も賛同だった。ソフィーが弱いのならば、相手が油断している今、不意打ちでもいいから先手を取ることが必須だ。

「ほら、やってみろって！ 昨日紙燃やしたんだろ！ いけるって！」

「え？ でも……」

「でもない！ 頑張れ！」

促されたとおりに炎を出そうとする。彼女の脳内で必死に昨日の経験を再生させ、手の先の方に火のような明かりが灯りかけたその瞬間。

ベルテルから放たれた猛烈な熱風とともに灼熱の槍がその灯火を飲み込む。

翔が度肝を抜かれる横で、一步も動けなくなってしまったソフィーが佇む。

「なーんだよ、その線香花火みてえなの。もういいだろ？ 悪いけど、早いところ降参してくれないかなあ？ どうせこれ以上戦ったって無駄だろ？ いつもみたいに悔しさいっぱい表情で無様に退場してくれよ」

その言葉とギャラリーの嘲笑にソフィーはビクツとする。心理系の能力者もいるので、このように言葉でメンタルを揺さぶることは許可されている。しかしベルテルは炎系。彼の能力とは全く関係がない。これはただの挑発行為であり、侮辱行為だ。

「……っ……！」

ソフィーは黙りこくってしまう。下を向いて、口を真一門に結ぶ。そのいつもでは全く見せないソフィーの姿に翔はすっかり驚いてしまった。

「お、おい？ 急にどうしたんだ？」

視線を逸らして、答えようとしなない。あの高飛車な態度がまるでウソのようだ。

「……？」

翔はソフィーの急激な態度の変化に戸惑う。

「もおいいだろ？ そのヤツも。ソフィーはそんなもんだ。いつまで経っても成長のかけらも期待できねえ出来損ないなんだよ！」

お前も苦勞するよなあ？ 傲慢だけが取り柄の勘違いお嬢様の取り巻きなんざ、やってられるかってな！ ギャハハ」

ソフィーの方を向いて心配していた翔は、ベルテルの方にずっと視線を送る。

「……」

「努力も知らねえお嬢様が勘違いで来られちゃ困るんだよなあ。どうせ権力でどうにでもなるとか思ってたんじゃないやねえの？ そんなじやあ何千年経っても俺に触ることもできないぜえ！？ さっさと家に帰ったほうがよっぽど賢い」

ベルテルを見つめる翔の視線が、少しずつ鋭くなる。

翔は知っている。

ソフィーがこの日のためにどれだけ努力をしていたか。

ほんの少しだけれど、ソフィーは初めて使うことのできた能力に満面の笑みで玩具を買ってもらった子供のように無邪気に喜んでいった。教科書は使い古されすぎてページが膨れ上がってしまった。そのソフィーが、努力を知らない。ベルテルは確かにそう言った。

ベルテルは彼らの目の前で、大声を上げて嘲笑している。

その一方で、下を向いてしまったソフィーの目には涙が溜まっていた。その雫が一滴、地面に落ちると同時にソフィーは拳手をする。

「……降さ——」

「嗤うな」

ソフィーはハッと顔を上げる。

背を向けて彼女の目の前に立つ中里翔。

「ちょ、ちょっと翔！ もういいの——」というソフィーの言葉など、今の彼の耳には寸分も届かない。

「……はあ？」

「必死に努力してきた人間を嗤うなって言ってるんだよ……!!」
今まで聞いたことのないような翔の声。ソフィーは思わず息を呑む。

「お前は知らないだろうがな、ソフィーはソフィーなりに努力してきたんだよ。それでも勝てねえのは仕方ないさ。——ただどな、お前に勝てないっていう、たったそれだけのことが理由でソフィーの存在意義まで否定するようなことを言う資格なんぞ誰にも無えはずだ……! どれだけ強くてそんな腐ったセリフしか吐けないお前なんかに……! ソフィーに好き勝手言っただけの権利なんて、どこにもないだろうがあッ!!」

翔は自分も気付かない内にベルテルに向かって走り出していた。誰も自分の努力を評価してくれなかった幼少期。努力しても努力しても、誰も見向きもしてくれなかった。だからこそ。今のソフィーが当時の自分を見ているようで耐えられなかった。

「あーあ、愚かだよ。お前もソイツも」

生あくびをしながら自分に向かってくる翔を見る。「もっと近くに来いよ……お前の戯言ごと焼き尽くしてやるからよオ……!!」と心中でほくそ笑む。

翔はなりふり構わずにベルテルに突進する。

ソフィーが何か叫んでいるが、全く持って聞こえない。

ベルテルまであと約5メートル。

翔は妙な感覚に包まれる。

ベルテルの行動ひとつひとつが、まるでコマ送りかのようにゆっくりと再生される。

ギャラリーの声もまるで水中に入ったかのようなこもり具合。

空気の流れさえ自分についてこれていないような、そんな感覚。息苦しささえ感じるほどだ。

ベルテルの表情がゆっくりと焦りの色を見せ始める。それと連動して、彼の右手から火種が出始める。これにいち早く気がついた翔は、右手を思い切りはたいてその火種を打ち消す。はたかれた彼の手はゆっくりとその衝撃を身に受ける。ベルテルの右手が外側に大きく叩かれた結果、彼をガードする手はもう間に合わない。

翔はその隙に、全身の力を込めた右手を彼の顔面に叩きこむ。地面に叩きつけるような角度で、思い切り叩きこむ。

ベルテルの体が宙に浮くのが、手にとって分かった。

地面にたたきつけられるベルテル。

再び翔が気がつく頃には、もうあの感覚は消えていた。

ギャラリーは水を打ったようにシンとしてしまっている。

「あ……あれ……？」

自分自身でもこの状況がよく理解出来ない。ふと前を見ると口を開けて大の字で倒れているベルテル。後ろには同じく口を開けて固まってしまっているソフィー。

「ベルテル・ベックフォード、戦闘不能。勝者、ソフィー・ド・モンフォール」

カトラル先生の旗がソフィーの勝利を高らかに宣告する。

この予想だになかったビッグキリングに、場内はこれまでにな
い歓声に包まれた。

囁うな（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ！

カウンターリミット

「『カウンターリミット』」

ウラ・アーネ・フリートリッヒ先生がわざわざソフィーの寮室に訪れてくれている。そしてどこか得意気に言い放った言葉がそれ。

召喚人・中里翔とその主人(?) ソフィー・ド・モンフォールはそれが何を指しているのか分かっていなさそうな表情を浮かべて困惑する。ウラ先生も二人の反応を伺いながら、じろじろとその様子を観察する。

「……わかんない？」

一向に何か心当たりのあるような気配を感じさせない二人。当てて欲しかったのだろうか、見かねた彼女は少し残念そうに自ら解説を始める。

「能力だよ」

「能力……？」

「そう。召喚人中里翔くんの能力。教師陣の審議の結果、この結論に至った。能力の性質、発動タイミングから推察するに、あなたの能力は『カウンターリミット』。政府機関で厳密な審査をしてもらうけれど、おそらくそれで間違い無いわね」

翔にとっては記念すべき初の能力発動であるが、カウンターリミットなど生まれてはじめて聞いた単語だ。どういう能力なのかもよくわからない。喜んでいいのかどうすればいいのか分からない様子で、ついついたじろいでしまう。ソフィーにも初見の能力らしく、翔のとなりで同じような反応を見せている。

「ま、珍しい能力だからね。知らなくても当然っちゃ当然かなあ？」

「それってどんな能力なんですか？」

ソフィーの間に「ふふん」と鼻を鳴らして答える。

「見て字の如く。『制限範囲及び時間内有効能力』。制限能力の一種だね。この仮定が正しいという前提の上で推測するならば、翔く

んはその中でも時間単位を拡充する能力だと思われる。有効距離範囲は……そうだね、おおよそ対象者の半径3メートル前後といったところかしら」

説明してもらってもよく分からない。これが翔の素直な感想だった。しかしその横で説明を真剣に聞いているソフィーは両の手をギュツと握りながら質問を続ける。

「……では先程の翔の高速体術は時間拡充能力『カウンターリミット』が発動していたということでしょうか？」

「その通り！」

ウラは元気いっぱい笑顔で返事をする。

「概算だけれど、拡充度は1秒につき10秒ぐらい。リミットはそれに依存するから同刻」

自分を差し置いて進んでいく会話だが、翔にとっては他人事ではない。しかし頭がついてこない。超能力について語り合うなんてオカルトサークルみたいなことは全く無縁な生活を送っていた彼。思考を180℃真反対にすっぱり切り替えられるほど、既成概念を取り払える器量はまだ備わっていない。

「……あの……、つまりどういことですかね？」

「はあ？」

間髪入れずにソフィーからツツコミが入る。ついでに「なんでまだわかんないのよ!？」という呆れ気味の言葉ももらう。

「だっ、だって！」

「もう……なんでこれで分からないかなあ？　いいわ、簡単に説明してあげる。あんたの能力はね、ひとことで言うとき間の拡大。他人の体感時間を引き伸ばした世界で行動ができるってこと。あんたの場合はそれが1秒につき10秒。普通の人が1秒に感じる時間を、あんたは10秒に変換した上でその効果を維持したまま行動ができるってこと！」

「……!!」

翔はあの時不思議な感覚を覚えていた。

ベルテルの動きが急に遅くなり、いとも容易く一撃を当てることができた。

ベルテルはインフェルノの能力者でB+の能力評価を受けている。そんな彼が戦闘ド素人の翔に敗北を喫するなんて起こりえるはずがない。しかし現実とは違った。予想は完全に裏切られた。

翔の勝因はコレであつたのだ。

その解説を聞いていたウラは「そゆこと!」というど、「それじゃ、私はこれで失礼するよ。これを伝えに来ただけなんだ」とはにかむ顔を肩越しに扉を開けて帰っていった。

「へええ……俺にそんな能力があつたなんてなあ……。でもなんか実感湧かないな。ベルテルの時も気がついたら――」

ソフィーの方を振り向いた瞬間。

全身が温かく柔らかいものに包まれる。

そしてそのままギュウツと強く引き寄せられる。

彼の呼吸がほんの一瞬だけ停止する。

ソフィーが翔の肩に回した手と、自分の胸に埋められた彼女の可憐な顔。

翔はソフィーに抱きしめられたのだ。

突然のことで彼は何も行動がとれなくなってしまふ。

「ありがと……」

小さい声が聞こえる。

「えっ……?」

彼のよくわかってなさそうな反応に、「察しが悪い!」と文句もこめられた上目で彼を見つめる。

「だから、ありがとうって言ってるの! ベルテルに言われた時、私をかばってくれてありがとうって……! 私はまた逃げ出すとこ

ろだった。それをあんたが引き止めてくれたのよ！　それに……」

ソフィーの胸に翔のあのセリフが鮮やかに蘇る。

ガラにもなく彼女の表情が緩む。もちろん、彼に見えないようにその時だけうつむく。

「だから、これはお礼！」

人生で初めて女性に、しかもあの高飛車なソフィー・ド・モンフォールに素直な気持ちで抱きしめられる翔。

言葉が全く出てこないところから察するに、これは彼の人生において幸せな出来事ランキングの相当上位にランクインするほどの出来事だろう。



同日同刻。

グリーンデン能力開発研究所は業火に包まれていた。

資料が火の粉と化し、逃げ惑う学者たちの合間を猛烈な熱風と共に踊る。

研究室の白い壁が燃え盛る炎に赤く照らされ、一瞬の内に混乱の渦に投げ出された人々の影が交錯する。

「逃げろ！」という声と悲鳴が入り混じり、排水口に流れ込む雨水のように逃げ惑う人々が出口に殺到する。

その様子を、離れた位置から眺める一人の少女。

腰に手を当てながら「これで10個目」と独り言のように呟く。

長い黒髪が熱風に撫でられる。

施設に背を向け歩き出そうとしたその瞬間。

半透明のガードナーを左手に、アサルトライフル『AK-47』を右手に携えた兵士達が彼女の行く手を阻むように立ちふさがった。「えらく物騒じゃない」

白のシャツに白のズボン。

そう言葉を紡ぐその少女は、女の子だというのにシャツのボタンはだらしなく適当な印象を受ける。美麗清純派な印象を受ける端正な顔とのギャップがまたその愛らしさを際立てて演出している。

AK-47を向ける兵士たちは彼女の言葉を黙殺する。

「手を上げろ！」と中央先頭に立つ兵士が声を張り上げるも、その足が震えていることは彼女にバレていた。「足、震えてんじゃん」と溜め息をつかれる。

「私、もうすること済んじゃったんだよね。だからさっさと退却したいんだけど、できれば穏便に済ませてくれない？ 私も別に戦う気なんてないんだし、そっちもイヤでしょ？ どうせ政府の奴らに命令されて半ば無理矢理駆り出されたんだと思うケドさ。逆らえないっていつても、こんな風に自分たちを鉄砲玉みたいに扱う奴らだよ？ 言うこと訊くことはないって。あ、こういうのはどう？ 戦う前に逃げられ——」

乾いた銃声が響いた。

恐怖に負けた兵士の一人が少女に発砲したのだ。

しかし、その意表をついた発砲も虚しく弾丸は彼女に届かない。

「……はあ、結局こうなるんだね」

少女はイヤそうな顔をする。

いかにも17歳らしい、美麗清純派の印象を受ける端正な顔。その表情がグニヤリと曲がる。

発砲した兵士は「ヒィッ！！」と声を上げて、愚かにも彼女に背中を向けて逃走を図ろうとする。それを見た周りの兵士たちも恐怖心に顔が引き攣る。

――粉々に粉碎された弾丸がサラサラと落ち、草花や木々達が煩くざわめき立つ。

「恨まないでよ？ 先に仕掛けたのは、そっちなんだから」

強調される『先に』という言葉。

その語調に戦慄を覚えた兵士たちは、整然と組まれていた陣形を無視して蜘蛛の子を散らすように逃げる。全力で逃げる。叫び声を上げながら、必死で逃げる。

「応援要請！ 応援要請を願います！ ただいま劣勢により、ワルキューレⅡドラゴンの出動を願います！ 負傷者数不明、建物は現在も炎上中！」

兵士が本部との連絡をトランシーバーで行う。その悲壮感漂う会話がコトの酷さを詳しく表している。

「犯人はシャルロッテ！」

施設の爆炎が、雲ひとつなかった夜空を暗く覆う。

「ASTG第2位、シャルロッテです！！」

カウンターリミット（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ！

対峙

アリシア・イエールオースに指令が出たのはその日だった。

「じゃあ、ちよつと行ってくる。すぐに戻ってくるよ。にゃー」

その一言を残して、ストレシエール国学院に背を向けて出発した。

「政府も頭を抱えているようだね。それも相当に」

アリシアが駆りだされた後、ユーディットは廊下で推理ショーを繰り広げる。

「頭を抱えてるって、やっぱりアレ？」

「うん。グリューデンも襲われたし、しかも政府が用意した兵士まで全滅。これで政府直営機関の施設が10連続でぶっ潰されてるんだから、政府はメンツ丸つぶれだよね」

「それでこれから歯止めをかけようと」

「おそらくは」

ユーディットとソフィーが議論合戦を始める。彼女たちの隣で傍聴している翔はまたもやハテナマークをその表情に刻み込んでいる。「このストレシエールだって政府直属なんだから、戦力ダウンは避けたいところなんだけどね。アリシア抜きじゃ戦力が大幅に落ちちゃうよ。まあそれは攻撃対象が『政府機関に絞る』という仮定条件の場合だけど」

「でも見解によると次も能力開発センターなんでしょ？ 確かに襲撃されてるのはそういう研究所みたいなトコばかりだし。でもさ、政府に恨みでもあるんならそんな周りくどいことしないで直接乗り込めばいいのにねえ」

「そこなんだよ。何百人もの兵士をたったひとりでブッ倒しちゃうくらい強いんだったら、政府に直接乗り込むのも容易いハズ。でも

それはしない。何か策あったのか、行き当たりばったりの犯行なのか、それとも何か明確な目的があるのか――」

と、ここまで話に熱中していた二人の視界に真っ直ぐ手を挙げている一人の少年が飛び込んできた。

「……どうしたのよ？ 翔」

体面を向け直す。

「あの！ 全ッ然わかりません！！」

その正直な告白にユーディットは「あ、そうか」と手を叩く。

「ショウくん、『シャルロッテ』って聞いたことない？」

「ないなあ」

「あら、言ってなかったかしら？」

「言っていないんじゃないか？ 今初めて聞いたぞ」

ユーディットとソフィーが目を合わせる。そして同時に翔の方を向く。

「最近ね、能力開発センターが襲撃される事件が多発してるの」

「開発センターは政府直営機関。それが襲われるのは政府の威厳にも関わることだからできるだけ速やかに事態を解決させたいわけ」

翔は彼女たちの話に耳を傾け、その都度に相槌を打つ。

「じゃあさっさとその犯人を捕まえたらいんじゃないの？ ってことなんだけど。それがそううまくいかない。犯人はもう分かっているんだけど、捕まえることができない」

「『絶対的な能力の前では全てが無力』。ASTG防衛省長官ネルフィット・コルテスにそう言わしめた人物。その能力者こそが――」

「――シャルロッテ。ASTG第2位の能力者よ」

翔の胸の鼓動が少しずつ早くなっていく。

手のひらには汗がにじむ。

「素性一切不明、行動目的不明、そのうえ現状敵なし。あの第1位の王女に唯一単体で勝てる可能性のある人物。そりゃあアリシアの手も借りたくなるかも。まさに猫の手も借りたい！　ってこと？」

ユーディットが笑顔で猫の手マネをする。

「あのさ、アリシアってそんなに強いんだ？　対戦試験でも降参されてたし、今回は政府にまで駆り出されてるんだろ？　それって相当な能力者ってことだよな？」

「そうだよ。アリシアは強いよ」

「なんだって第5位だから。弱いはずがないわ」

翔には些か信じられなかった。

猫耳を生やした可愛さ満点の容姿に小動物のような雰囲気。小さな体が躍動する姿は想像に容易いが、それが5位の力を誇るほど強いとなれば一気にイマジネーション力が試される難問となる。翔は無意識に疑いの表情浮かべてしまう。

「『冪乗』っていつてね。ま、いずれ分かるよ。それはそうとして、ソフィー？」

「うん？」

「さっきから気になってたんだけど、ソレは？」

ユーディットがニヤニヤしながら指をさす。

その先にあるものは、翔の右腕を握るソフィーの手。

「えっ！　あつ、これはその、何ていうか！　こ、この前のお礼っていうか！　その……！」

ソフィーは急に焦りまくる。しかしその手は離さない。

「なんか今朝からずっとこんな感じなんだよ。『どうしたんだ？』って聞いても『いいの！』の一点張りだし」

この情報にユーディットは「へえ〜？」とこみ上げてくるニヤニヤをこらえたような様子で二人を眺める。

「ふふん、まさかソフィーがこんな簡単に――」

「――違う！　違う！！　何言ってるのよお！」

「だってずっとそんななんなんでしょ？　これはもう――」
「違うわよ！　これはその、何ていうか、お礼の一種よ！　手握ってあげてるの！」

キッと鋭い涙目の視線が急に翔の方に向けられ、「何勘違いしてるのよ！　バカ！　バカッ！！」と開いている方の手で殴打される。殴られながら翔は思った。

「なんでカウンターリミットが発動しないんだ」と。

世の中はそう都合よく動いていない。



「見いつけた」

今宵の空も雲ひとつ無い。

ズイグナル能力開発研究所――ASTG直営管轄能力開発センター。
I。

アリシア・イエールオースは人気のなくなったその研究所の敷地で夜風に吹かれながら一人の少女に目標を据える。

「……もう、ついてないよ」

アリシアと対峙するその少女は黒髪を風にサラサラと遊ばせながら残念そうな表情を浮かべる。

「シャルロッテ発見。ただ今より任務を遂行します。にゃあ」

告げ終えたトランシーバーが天高く放られ、漆黒の夜空に不気味に溶けてゆく。

対峙（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ！

幕乗

ストレシエール国学院第一会議室。

中央奥のイスにはラス・ベギリスタイン校長。

右に時任鹿之助。その隣にカトラル・フィッツジェラルド。彼らの対面にはウラ・アーネ・フリートリツヒとシェン・マクギーデイが座っている。そしてその会議室につながるドアの前にはレギンレイヴ・ドラゴンがおとなしく鎮座している。これだけでも今会議室で行われている会談の機密性、重要性が伺える。

「テルミナ、グリュードン。恐らく次はズイグナル。まだアリシアからの連絡が届いていないのが気かりではあるが、シャルロッテの攻撃対象から見ても予想は的中しているでしょうね」

カトラルの眼鏡に妖艶な月の光が鈍く反射する。

「確かに。攻撃目的に関しては未だに皆目見当もつかないが、政府関連組織を狙っているのであればこちらも迎撃態勢を整えねばならない。だのにアリシアを貸し出してしまうのは少々心配ではある」腕組みをしながら眉にシワを寄せる鹿之助。

「実際今戦闘中なのかしら？ 気になるところよね」

「戦闘が始まれば政府に連絡が届き、通達が来るはずなのだが」ウラの心配どころにシェンがいつも通りの筆談で対応する。

「……。シャルロッテはAngel Codeの犠牲者のひとりである。もし彼女がここも襲うのであれば、恐らく標的は私であろう」ラス校長は片手を机につけて立ち上がる。

「彼女が私に制裁を下すというのであれば、受け入れよう」

「そ、それはできかねます！！」

鹿之助が声を荒げる。

「どんな理由があろうと、命の恩人であるラス校長殿に向ける刃は私が――！」

「――しかし！ だがしかしだ。私だけに留まらず周りの生徒まで

も巻き込むというのであれば……」

「……………」

「総員、全力を以て阻止すべし」

鹿之助は続く言葉も見つからず、思わず立ち上がった体から力を抜いてイスに座り直す。腰に差している刀がガチャリと金属音を響かせる。

「いいのだよ」

「……校長殿……！」

「これは私の責任だ」

◇ ◇ ◇

シャルロッテ。

A S T G 第2位にしてこの組織にも属さない、孤高の少女。

風になびく長く美しい黒髪と首をかしげる可愛らしげな仕草が妖艶な月の光に妖しいシルエットを落とす。

その何気ない相貌からも、無意識に、仄かに漏れ出流る圧倒的強さを纏ったオーラ。自然界のすべてが彼女の味方をしているような、絶対的な強さがひしひしと本能に直接伝わってくる。

シャルロッテはつい最近になって存在が確認された上位能力者。

政府もまだ彼女の素性をつかめていないのか、上位能力者で詳細な能力が記されていないのは彼女のみ。彼女の攻撃対象となった研究所はもう10カ所に上る。政府はその度に兵士を派遣するも、結果は全て惨敗。銃撃はおろか、超能力者であろうと簡単にねじ伏せられてしまう。政府の力を以てしても太刀打ちができていない。

その圧倒的存在が今、アリシアの前に――。

「取引をしよう！」

シャルロッテは人差し指をピンと立てる。

「はぁ……？」

身構えていたアリシアも思わず拍子抜け。

「取引い？」

「そう！ 取引。戦った体にするってこと。私は誰かと戦いたくてこんなことをしているんじゃないの。互いに無駄な労力は避けたいじゃない？」

「戦いたくないのは同意だけど、この状況においてそれができりやあ苦労しない。にゃあ」

「えー……」

口を尖らせるシャルロッテは一息ついた後で「あんたも大変ね」と小さく呟く。

「ワルキューレⅡドラゴン。呼ばないの？」

「人が悪いにゃあ」

アリシアは思わず苦笑する。

「じゃあ、あなたは負け戦にわざわざ出てきたってこと？」

「そんなつもりは毛頭ない」

ワルキューレⅡドラゴンはASTG最高クラスの戦力を誇る守護龍。このドラゴンが登場するときには必ず政府が勝利する、政府と国民にとってまさに絶対的な存在。周囲を圧倒する神々しい姿は戦わずして対戦相手の戦力を一気に削ぎ落とす。見合った瞬間に敗北と諦観を脳髄に叩きつけられる。絶望と勝利の象徴。

「なるほど、ワルキューレ無しで勝てると」

「そーんなこと一言も言っていないし。にゃあ」

その象徴は国民のすべてが認める絶対勢力。絶対権力。絶対破壊。対戦相手に絶望を刻みこむ姿は政府の権力誇示であり、彼らの自尊心。

——それでは、もし。

もし、そのドラゴンが負けてしまうというようなことがあれば、政府はどうなるだろうか。

国民はどう思うだろうか。

絶対に負けが許されないドラゴンが、負けてしまったてはどうなるだろうか——。

アリシアは身構える姿勢を崩さない。「政府は恐れている。シャルロッテを恐れている。ワルキューレⅡドラゴンがシャルロッテに負けることを——！ 政府の象徴に負けは許されない。だからこそ負ける危険性のある相手だと、政府はワルキューレを出したがらない。と言ってもワルキューレを脅かす存在は王女とシャルロッテだけ。どんだけだよ！ って話だよ……にやあ……」シャルロッテの一挙手一投足に注意を払いながら、次々と思いつく敗戦濃厚な状況証拠。アリシアは地面に落ちている小石をひとつ拾い上げる。

「やっぱ捨て駒扱いの体質は変わってないんだね。政府ってのは。どこでも一緒。全く信用ならない。正義の名のものの行為ならば全て正当化されると思ってる。人を殺しても。人生をぶち壊されても。大切な人を奪っても。それが正義と名のつくものならば許されると思っている。どれだけの人の運命をねじ曲げているかなんて、結局アイツらにとっては関係ないんだよねえ。所詮はご都合主義。Angel Codeが聞いて呆れるよ。どこが『天使』なのか説明して欲しいくらい」とここまで話したところで「3」という数字の宣言が彼女の耳に届く。同時に一筋の光線のように放たれた小石がシャルロッテを貫かんと発射される。しかしそれはシャルロッテの体表面に到達するより前に、ざわめき立つ空気と風によって粉々に粉碎されてしまった。

「幕乗、ね」

「よく知っているね。イヤだなあ。戦い辛い」

「そりゃあ。ASTG第5位、アリシア・イェールオース。トップ10となれば有名だし、私だって知ってるよ」

「それはどうも」という言葉と同時に発せられた「2」という宣言と共にアリシアは急激な加速を見せて一気に差を詰める。眼前のシャルロッテは「うわっ？」と驚いた様子を見せているが、全く慌てる素振りは見せない。

アリシアの手がシャルロッテに触れるか触れないかの間合い。突如大型台風のような風がアリシアを襲う。勢いが殺されてしまった彼女はそのまま風圧で地面に押さえつけられる。その間シャルロッテは手ひとつも動かしていない。

「宣言した数字の幕乗、でしょ？」

「……」

「体表面に触れたものの力の大きさを定数とし、最大10までの数を幕乗の値として変換する能力。つまりは触れられたらアウトってことよね」

地面が凹みそうになるほどの風圧で押し込められるアリシアも精一杯にシャルロッテを見上げる。

「あんたはそこで大人しくしてて。私だってできれば穏便に済ませたいのよ。それじゃ、こっちはすることがあるから」

そう言い残した彼女は、風で抑えつけられているアリシアを尻目にズイグナル能力開発研究所に足を踏み入れていった。

幕乗（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ！

勝てない

ズイグナル能力開発研究所の2階、資料管理室。

薄暗い館内にシャルロッテの歩く音だけが静かに響く。

「超能力研究センターもデータは電子管理、か。皮肉なもんだよ」
電源の落とされたモニターと、それに接続された端子の数々。シャルロッテは慣れた手つきで主電源を入れてコンピューターのメインシステム（集中管理制御システム）を起動させる。もちろんパスワードを要求されるが、シャルロッテの風の擦り合わせにより発生させられた強烈な電磁波で強引に突破する。

「相も変わらずセキュリティが緩くて助かるわ」と独り言の感想。
暗い室内にぼうつと光るモニター。それに青白く反射するシャルロッテの姿。

「1943年の記録……」

シャルロッテの目に飛び込んでき文章。1943年、中里翔のいた世界で起きた出来事が書かれている。シャルロッテはそれを一読し、歯を強く噛んだ。

つがみみのる
「番舞実二等兵、サイパン沖にて戦死とする」

画面を見つめる。

「『と、する』、か」

「はぁ」と息をつく。

「やめる気がないのよ。政府は。こんな歴史歪曲、続けて良いワケがない。政府の都合の良い歴史ばかりに改竄されて、良いワケがない。……良いワケが……ないのよ……！」

そう嘆きながらモニターを見つめる彼女に、いつもの飄々とした無邪気さは消し飛んでいた。

更に画面を下にスクロールする。

『20???年。月映村事件。容疑者、首謀者及び犯人…風祭泉。罪

状…無差別大量殺人。処遇…現行犯即時射殺』

大きな音が響いた。

シャルロッテのいる資料管理室にもその振動はダイレクトに伝わり、柵やコンピューターが倒れる。

「……意外と早かったじゃない」

「まあね」

「もうちょっと手こずって欲しかったなあ」

その語調はいつものシャルロッテに戻っていた。飄々としながらイタズラに苦笑する。

「アービトラル。私の能力の正式名称」

「恣意性……」

「私の宣言数値は確かに10まで。それ以上の冪乗はできない。でもね、上げるだけじゃないんだよ。にゃあ」

参ったな、という表情を浮かべるシャルロッテ。

「マイナスの冪乗かあ」

「そーゆーこと！」

マイナスの冪乗は、定数を分母にとる。宣言値をXとすると、勢いが『 $1/X$ 』に削られるということになる。アリシアはそれを利用してシャルロッテの起こした暴風を消し去ったのだ。

アリシアが地面をトンツと蹴る。

するとその波動は拡散する水面のように大きくなり、シャルロッテの足場もろともぶち抜く。間一髪跳んで回避し、空中で体を一捻りしながら体右側面に空気の渦を纏い線のように放出。アリシアはマイナス冪乗「4」を宣言するも、横っ飛びの緊急回避。アリシアのいた場所は綺麗な円がぽっかりと開いており、一階の状況が鮮明に把握できるくらいだった。それに一瞬だけ注意が削がれたほんのコンマ数秒の隙にシャルロッテは空気を切り裂くような音を立てている風を纏わせた右足をアリシアの左胴体にぶち込む。

隙をつかれてしまったアリシアは防御もほとんど間に合わず、自

身で管理室内の機材をなぎ倒しながらぶっ飛ばされてしまった。

断線した大型コンピュータの導線がバチバチと火花を散らす。

「風槍^{ランス}っていつてね。本質はそこじゃあないんだけど」

アリシアが瓦礫の中から這い出し、月明かりに映える少女に視線を送り返す。

「……………ッ！」

苦渋の表情を浮かべるアリシア。

その目に映るシャルロッテ。

次に打って出るべき行動は何か。

答えはひとつ、攻撃しかない。

ではどのようにして攻撃をするか。

今のアリシアには、それが思いつかない。

微塵も思いつかない。

必死で考えても、どれだけ搾り出そうにも、まず近づけないので意味が無い。

もし仮に近づけたとしても、ほぼ脊髓反射的に攻撃を繰り出してくるシャルロッテに対応するのは至難の業。一度は躲けたとしても、二撃、三撃となるといつかは必ずヒットしてしまうだろう。アリシアのアービトラルはその名の通り「恣意的な宣言冪乗」。恣意的であるがゆえに自由度はとも高く、あらゆる対象物に合わせて柔軟に対応できる。しかしそれであるが故に。アリシアのその能力は任意によるものだということを示す。シャルロッテがオートで風を扱うのであれば、その反応速度は任意発動能力の彼女と比にならない差が生まれる。

アリシアは一瞬で思考を巡らせ、空を仰ぐ。

「勝てない……………にゃ……………」

「うん？　　ということは降参でいいのかな？」

シャルロッテは期待に満ちた表情を浮かべる。

「いや、それはできない」

「何よそれえ」

「勝てないけど、勝たないといけない」

「そーいうの、嫌いだなあ。死んじゃうよ?」

「構わない」

「……」

「……」

「本気で言ってる?」

「もちろん」

シャルロッテの視線が鋭くなる。

「あんたが今ここで死んだとして、悲しむ人はいないの?」

「……?」

「もし。もし今一瞬でも頭をよぎった人がひとりでもいるなら、あんたは死ぬべきじゃない。必死で生きようと努力する義務がある。その人のために生き残る義務がある。でないと、後悔するよ? 今生かされている私たちのこの生命、この世界は、命を落とした人たちがどうしても見たかった未来なんだよ。軽々しく命をかけるな。でないと本当に殺すわよ?」

アリシアは目を丸くした。

「これが、自分の目の前にいるこの人物が本当に、あの残虐非道なシャルロッテ……?」

彼女の心中は大きく揺れる。

アリシアは信じられない。

まるで神に仕える人かのような彼女の発言。暴力的な表現はあるものの、命を投げようとした自分を諭してくれているその姿からは、政府の報告にあるシャルロッテの姿は全く想像もつかない。

「シャルロッテ……。お前は一体、何者――」

その時、ふと資料管理室の大型モニターに報告が入る。

シャルロッテが電源をつけ、そのままアリシアとの戦闘に入った

ため破壊は免れていたのだ。

その映し出されたメッセーじに、二人は絶句する。

「ストレシエール国学院、現在襲撃中」

文章は続く。

「犯人はシャルロッテ」

勝てない（後書き）

ご意見、ご感想などありましたらお気軽にどうぞ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7229x/>

Angel Code

2011年12月17日03時10分発行